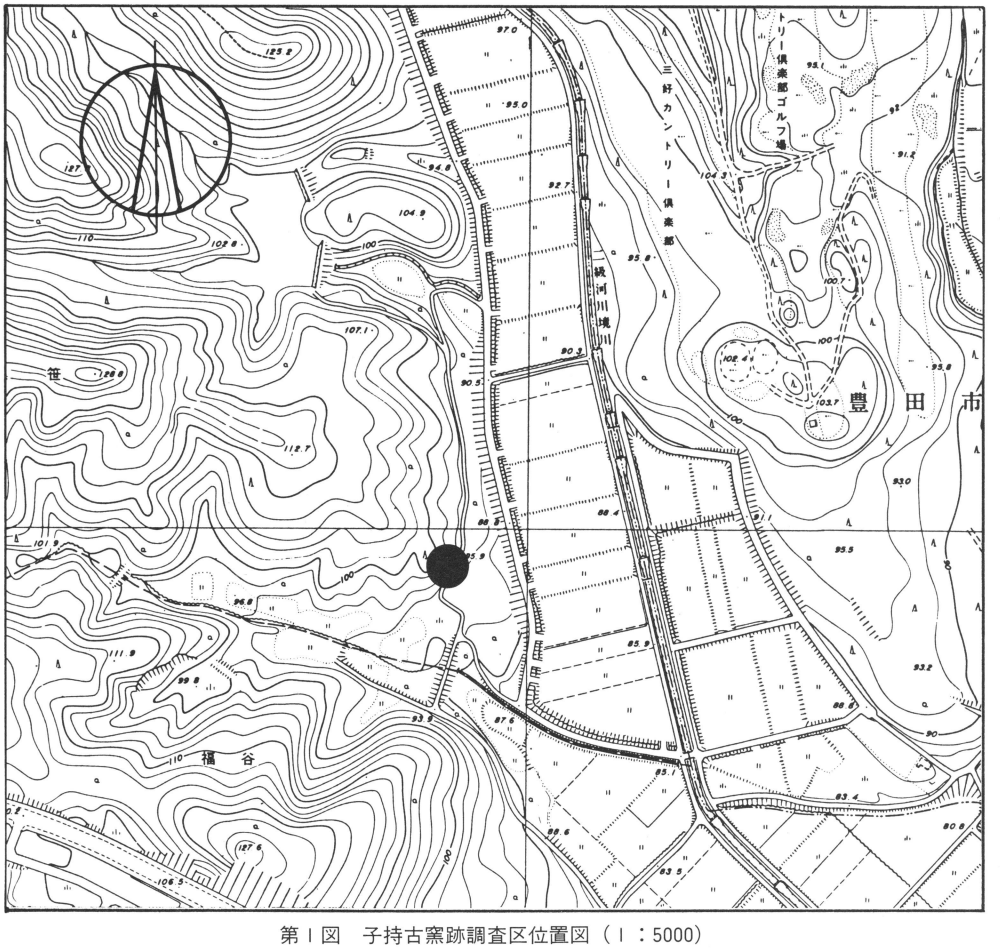
子持古窯跡

調査の経過

子持古窯跡は、西加茂郡三好町大字黒笹字丸根に所在する鎌倉時代の古窯跡である。本古窯跡は境川の上流域にあたり、南東に開口した開折谷の東側斜面、標高100ｍ前後に立地している。これまで同地区には、鎌倉時代の古窯である遺跡番号「Ｋ－Ｇ－２」と「Ｋ－Ｇ－３」の２基が残存するものとされていた(『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅰ(1980)』)。今回県企業庁による内陸用地造成の事前調査として、伐採を約5000㎡行い、その内の約1300㎡の範囲にわたり調査を実施した。

調査の結果、「Ｋ－Ｇ－２」と考えられる古窯１基とその関連施設が検出され、多くの成果を得ることができた。



第Ⅰ図　子持古窯跡調査区位置図（１：5000）

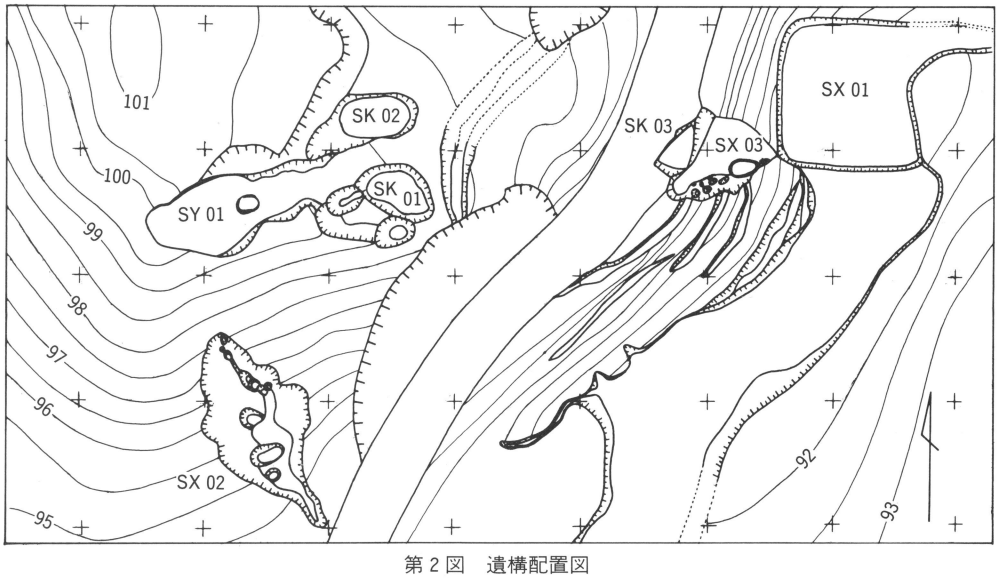
調査の概要

調査区内は遺構配置図（第２図）からもわかる通り、何か所にもわたって後世の改変を受けている。とりわけ旧地形の復元を困難にしているのが、調査区内を南南西から北北西にむかって丘陵東斜面を切り開いて第二次大戦後に敷かれた林道である。この他にも、重機で掘った土取りと思われる穴が点在していた。

調査の結果、当初焼成室上部のみ残存すると思われたが、煙出し部分を除き、良好な状態で窯体を検出することができた。ＳＹ01の現存長は７ｍ、最大幅３ｍ13cm、床面傾斜は平均で30度あった。分焔柱を有する13世紀頃の窖窯である。天井部は、焚き口から見て右側に陥没した状態で窯内に堆積していた。

窯内遺物については、焼成室内において天井部に押しつぶされる格好で、焚き口右手方向から山茶椀や焼台が多数出土した。また、燃焼室内においても山茶椀が乱雑に積み重なった状態で出土している。これらの状態は本窯の最終操業当時、窯出し前に天井部が崩落したため、焚き口左手の隙間から焼成室内の製品を取り出し、不完全品を燃焼室に廃棄したものと考えられる。なお窯体断ち割り調査の結果、２面の床面を確認することができた。

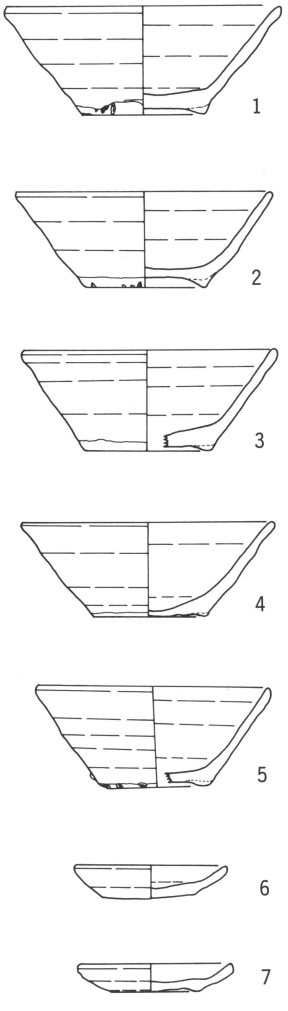
前庭部では２基の窯前ピットを検出した。長径３ｍ31cm、短径２ｍのＳＫ01と長径４ｍ80cm、短径１ｍ92cmのＳＫ02はともに楕円形状を呈し、山茶椀が多数出土した。



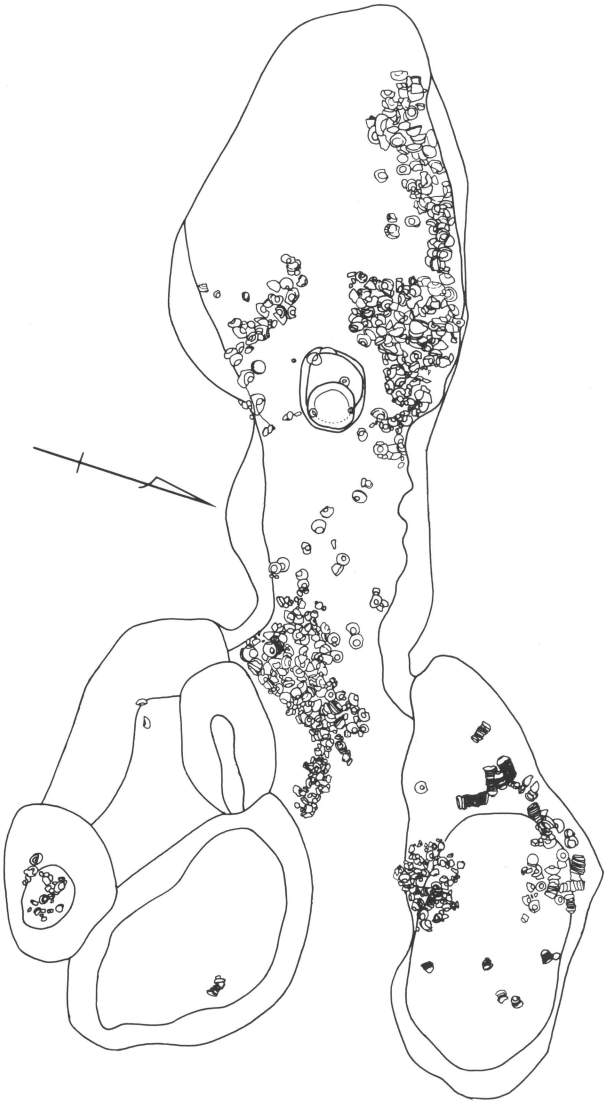
第２図　遺構配置図

なおＳＫ02の北西壁上部から、34個の陶丸を入れた山茶椀が出土した。焼いた陶丸を集めたまま置き忘れたものであろうか。ＳＫ03は粘土を貯めた長辺２ｍ10㎝、短辺90㎝、深さ70㎝の土坑で、灰白色粘土がつめられており、底部には小礫が敷かれていた。

遺物としては、13世紀前半代の多量の山茶椀が中心で、その他小皿や若干の陶丸も出土している。



第３図　SY01出土遺物



第４図　SY01遺物出土状況（１：80）

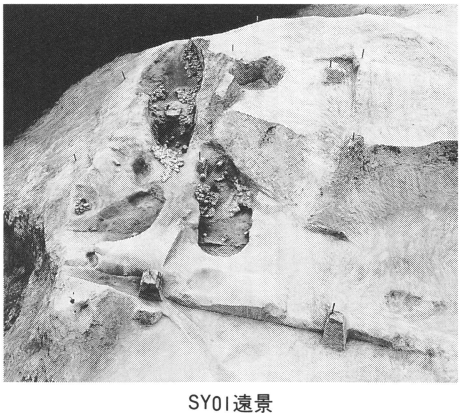
まとめ

本古窯跡の発掘調査のうち特筆すべき成果は、上記の遺構の他に採掘した粘土を水に浸して貯蔵・精製した施設と考えられるＳＸ01を検出したことがあげられる。

ＳＸ01は、ＳＫ03の東下方の谷底のり面が垂直に掘り下げられ、ほぼ５ｍ×５ｍの方形土坑を呈している。平坦な床面の西側部分には赤褐色粘土が２～３cmの厚さで貼られていた。そしてその直上で、直径数cm～60cmの灰白色粘土塊を多数検出した。

またＳＸ03は、最大幅３ｍ50cmを有する三角形状をしたくぼみと７段のステップからなる。さらに、そこから南へ水平に斜面をめぐる幅約50cmの細長いテラスを５条確認することができた。これらの施設は、谷底に蓄え、精製した粘土を運び上げるためのものと考えられ、ＳＸ01の関連施設ととらえてよいものと思われる。

本調査においては工房跡の検出はできなかったものの、窯体と灰原だけでなく粘土ピットや規模の大きな関連施設等が確認できたことは、同時期における窯業生産を考える上で格好の材料を提供することができたと考える。　　（杉浦　茂）



SY01遠景

分焔柱付近

SX01遠景

SK03とSX03